

五味説新考

猪飼 祥夫

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

五行説の中で五味と五臓の関係は、古来多くの議論がある。その説は、今文学派と古文学派の説に還元されると言われている。しかしその説が必ずしも二説に集約されるものでないことは林克の「五臓の五行配当について」『中国思想史研究』で明らかにされた。また五味相互間の関係については、真柳誠の「古代中国医学における五味論説の考察」『矢数退任記念』に詳しい。この論文では五味論の説を文献学的に四つの類型にまとめている。しかし真柳はその矛盾から五味の作用と五行の論理関係が見失われたのは『難経』の時代からであると考えている。

最近、敦煌文書の中から『輔行訣臟腑用薬法要』と言う文献が発見された。その中の五臓と五味の説は非常に論理的であり、五臓の補瀉が五味によって行われるという構成になっている。このことから五味の作用が後代まで利用されていたことが伺われる。

『素問』「蔵気法時論篇」には五臓の五味による補瀉が述べられている。「肝病者、……肝欲散，急食辛以散之，用辛補之，酸瀉之」とあり、「心病者、……心欲熅，急食鹹以熅之，用鹹補之，甘瀉之」とある。同様に他の臓もそれぞれ五味の対応が示されている。五臓の瀉に働くのは、肝には酸、心には甘のように五臓の本味であると述べられている。旧来五味と呼ばれていた酸苦甘辛鹹はそれぞれの対応する臓に対して瀉に働くことになる。また辛は肝に、鹹は心に、甘は脾に、酸は肺に対して補に働く。

しかし『輔行訣臟腑用薬法要』には、「陶云，肝徳在散，故経云，以辛補之，酸瀉之，肝苦急，急食甘以緩之。適其性而衰之也」「陶云，心徳在熅，故経云，以鹹補之，苦瀉之，心苦緩，急食酸以收之」とあり、脾は「以甘補之，辛瀉之」肺は「以酸補之，鹹瀉之」腎は「以苦補之，甘瀉之」とあり、瀉法に相違がある。肝だけは瀉の用法が酸で同じであるが、その他の臓には、母子の関係から子の五味が瀉に働くことを示している。また補の用法では「蔵気法時論篇」と同じであるが、その五味の関係は相生相克の関係が成り立たない。すでに『金匱要略』「禽獸魚蟲禁忌并治」には「肝病禁辛，心病禁鹹，脾病禁酸，肺病禁苦，腎病禁甘」とあり相克の関係で食物の禁忌を述べている。

『太平御覧』卷九八四には、『養生略要』に『神農経』を引いて「其味酸者，補肝養心除腎病。其味苦者，補心養痺（脾）除肝病。其味甘者，補脾養肺除心病。其味辛者，補肺養腎除脾病。其味鹹者，補腎養肺除肝病」とあり、その理論が「以一補身，不死命神，以母養子，長生延年，以子守母，除病究年」にあると述べている。この法則に従うならば同じ『神農経』を引く杏雨書屋の『穀類抄』「其味鹹者，補腎養肝除肺病」の文が正しい。「養」に母の五味が用いられ、「除」には子の五味が用いられている。

五行の五味の理論には、まず母子の関係から補瀉が理論立てられていたことが推測される。しかしながら後世になると五味が必ずしも母子関係だけでなく、相克の関係にも及んだ。本来の各臓の五味は補に働くと思われていたが、後には瀉として働くときれた。その混乱は由来する文献の伝来によるものか、学派の違いによるものと考えられる。『輔行訣臟腑用薬法要』の伝来を考えると唐代までは混乱があったが、五味の作用によって処方が運用されていたと考えられる。